

CALL を利用せずに『コミュニカティブな』授業をめざすには

TADESKA・2009年7月4日 田辺加恵

使用論文：

志柿光浩・吉田栄人・須田明博・三宅禎子

「コミュニカティブ・アプローチによる外国語教育とCALL*環境——初級スペイン語教育における事例の報告——」
(東北大学高等教育開発推進センター紀要、2008年)

※CALL=Computer Assisted Language Learning (コンピュータを利用して行う外国語学習)

■本稿の目的

- ・ それぞれに授業実施の条件、言語教育についての考え方、コンピューターの利用のし方が少しずつ異なる例を、CALLに懐疑的な言語教師を含む外国語教育関係者に知ってもらうこと。
- ・ それにより、東北大学内外におけるCALLをめぐる議論の深化に貢献すること。

■CALL史の時代区分 (Levy, 1997)

- ・ 1970年代：オーディオ・リンガル法
1980年代：コミュニカティブ・アプローチの浸透→4技能習得のためのコンピュータ使用
1990年代：インターネット利用によりインターアクティブな活動が可能に。ただし、コンピュータ処理能力についてはまだ問題あり
- ・ 2000年代 (スムーズなインターネット利用が可能)

■コンピューターの教育利用についての評価指針 (Yildiz&Atkins, 1993)

⇒ 項目b：コンピューター使用による指導のみで実現 (実行) 可能なこと

■今報告内容の構成

- ⇒ 項目3：学習内容と学習活動の概要
- ⇒ 項目6：学習者の反応と学習効果

■コミュニカティブ・アプローチ (communicative language teaching) とは

- ・ 一つの具体的な教授法ではなく、言語教育観ないしは言語学習観と呼ぶべきもの
- ・ Nunanが言う「経験主義的教授法：構成主義」(1999)がそれにあたる

「伝統的教授法：行動主義」 教師→学習者

「経験主義的教授法：構成主義」 学習者が主体

■使用教材

『¡Dime!』、『¡En español!』

■対象、クラス

東北大学1年次生の初学者、外国語初級レベル選択必修科目 (週2回)

1) 授業の概要と言語学習観

授業の目標：スペイン語の基礎を身につけさせる＝音声的特性を身体感覚として体得させる

- ・ スペイン語の音声を聞き取れるようになること
- ・ スペイン語表記を音声として再現できるようになること
- ・ スペイン語の文構造が理解できるようになること

2) 学習活動の概要

Unidad 1 Lección 1 第2回

前回勉強した中でもっとも重要なのはtúとustedの使い分けです。ustedは日本語の尊敬語みたいなものですが、señor/ señora/ señorita/ profesor/ profesora といった肩書きを付けて呼びかけるような人には必ずustedを使います。だから、¿Cómo estás, señor?とか¿Cómo estás, señorita? ¿Cómo estás, profesor?とは言いません。言えないというのではなくて、そういうのはおかしい言い方ということになります。

今日は、①人称代名詞（単数）の主格形と、②それに対応するser動詞の活用形（単数形現在のみ）を勉強します。

今日の課題

1. ビデオのせりふを真似しよう。
2. 主格人称代名詞とser動詞
3. Cuaderno de actividades p.18 Ch
4. Cuaderno de actividades p.18 C
5. 実際に使ってみよう。Charlemos un poco. A
6. 仲間の名前を覚えよう。
7. 書いて覚えよう。
8. ビデオをもう一度みてみよう。
9. 予習の確認：Cuaderno de actividades p.13 C.
10. 聞き取り練習：Cuaderno de actividades p.14 D

1
課題1
課題2
課題3
課題4
課題5
課題6
課題7
課題8
課題9
課題10

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/syoshida/espanol/dime/dime11b/dime11b.htm>

3) 授業戦術

人数制限（40名）、小テスト実施（1単元ごとに10分程度）、練習帳の提出、口頭発表（各セメスターに2回）、休憩タイムの設定、ネイティブのTA配置

4) 学習者の反応と今後の課題

<学習者の反応>

- ・ 大方の学生は好意的（2007年度、文・教で62.16%、法・経で71.43%が5段階で最高位の評価）
- ・ やる気のない学生や、文法を体系的・集中的に勉強したいと思う学生もいる。

<問題点>

- ・ 授業への取り組み方によって、到達する基礎のレベルにはかなりの開きが生じている

◎ CALLの利用なくして、基礎的なスペイン語力をほぼ均質的に身につけさせることは不可能

CALLは従来教師が果たしてきた役割の多くを代替し、かつ的確に目標へ誘導できる。

言語は教師が教えるものではなく、あくまでも学習者が自ら習得すべきもの。教師は補助者にすぎない。

1) 授業の概要

授業の目標：スペイン語で他者とのコミュニケーションを取れるようになるために必要な会話・読解・リスニング・筆記などの能力を身につける

2) 学習内容と学習活動の概要

コミュニケーション中心（シチュエーションを設定し、コミュニケーション練習を重ねる）

- ・ その日の重要事項を2～3点以内で示す（授業の方向性と目標の意識付け）
- ・ 各自でミニドラマ観覧、スキット部分を発音練習
- ・ 重点事項についてはプリントで説明（プリントが文法書代わり）、例文の発音練習も行う
- ・ 練習問題は個人で行う
- ・ 対人会話練習での失敗に対する不安感が軽減されるようになってから、履修者同士でシチュエーション練習

3) コンピューター利用学習活動の概要と位置づけ

コンピューターを利用した個人学習の利点：発音練習や練習問題が個人のペースで行いやすい

自分のペースでネイティブ・スピーカーの発音を聴きながら繰り返し学習

→ コンピューターは、最終目標である対人コミュニケーションに至るまでの有力な支援メディア

4) 学習者の反応と学習効果

履修者の側でもコンピューター利用の長所（自分のペースで発音練習できる、ネイティブの発音で練習できる）を感じ取っている模様

5) 課題と展望

- ・ コミュニカティブ・アプローチとの両立は可能では
- ・ コンピューターを利用しない学習との段階との橋渡し

事例3：個人の学習者に対応するためのCALL（三宅禎子）

秋期からの実質上再履修クラス

1) 授業の概要

初めてスペイン語を学習する学生と再履修者が混在

→ 学生間に存在する格差を前提として授業全体の統一性を確保しつつ、各自の習得レベルに応じた学習内容

2) 授業の拠って立つ言語学習観

- ・ 学習者中心の様々な教授法（コミュニケーション・アプローチ、タスクベースト・ラーニング、ピア・ラーニングなど）を駆使しながら、会話練習を軸に構成。
- ・ またコミュニケーション実践に向け、学習者自らが学習活動を行う様式の練習活動を取り入れる

3) 学習内容と学習活動の概要

- ・ 2～4名のグループでTAと会話（毎回実施、10～20分程度）：授業の学習内容を中心に
- ・ 教材の会話ビデオ：リスニング、リピート、隣同士で読み合わせ、ペアで会話練習
- ・ 作文、教材ビデオの読み方のテスト、聴き取りのテスト
- ・ プレゼンテーション

4) コンピューター利用学習活動の概要

①既存の情報をインターネットで入手し、授業活動に利用

②ハードディスク上の動画教材の利用

③④⑤ソフト（テキストソフト、録音ソフト、ディクテーションソフト）の利用

5) コンピューター利用学習の位置づけ

- ・ 授業活動の大半でパソコン機器を利用（ネイティブとの会話準備、会話能力習得のための活動）
- ・ 個別能力に応じて各自授業中の作業内容を容易に選択できる点で、パソコン利用は有益

6) 学習者の反応と学習効果

- ・ 各自がそれぞれのペースに合わせて学習に取り組んでいる
- ・ 学習者の習得レベルに格差があっても、コンピューター利用の学習活動により、スムーズな授業運営が可能

7) 課題と展望

- ・ コンピューター利用により動機付けを高め、自主的な学習態度が望めるようになった
- ・ CALLの導入により個別指導の割合増加→教師の仕事は増大

1) 授業の概要

2) 授業の拠って立つ言語学習観

報告者が目指す言語学習：「教師から学習者への知識の伝達」ではなく「学習者の持つ知識の変化」としての学習

- ・ 「宣言的知識」と「手続き的知識」
- ・ 「手続き的知識」の向上のために必要なこと：インプット&アウトプット、スペイン語使用の経験 etc.

3) 学習内容の概要

- ・ 「交流目的の言語行動」を伴う状況の中で、スペイン語の基本的文法形式（直説法現在まで）と必要な語彙の運用能力を身につける
- ・ 「取引目的の言語行動」における必要語彙やスキーマに関する知識と運用能力を身につける

4) 学習活動の概要とコンピューターの利用

音声・映像によるスペイン語のインプット

ビデオ教材をできるだけ多く視聴→スクリプト音読、パラレル・リーディング、シャドーイングなど

文法・語彙の明示的学習

ウェブサイトを使用して文法解説・語彙力強化（教室での説明・活動と平行）、語彙小テスト

聞く力の養成と聞き方の訓練

ディクテーション（ディクテーションソフト使用）

文字・音声によるスペイン語の産出

ネイティブ TA との対話活動の中で逐次訂正、録音回収（コメントをつけてフィードバック）

自己紹介文の蓄積（TA と教師による文法・語彙チェック）

形成的評価と自己評価

パフォーマンス・テストの実施（教師とのダイアログや会話をビデオ収録）

5) コンピューターの利用学習活動の位置づけ

いずれの活動もCALL環境がなくとも実施可能だが、CALLを使用すればデジタル信号を通して効率がよい

6) 学習者の反応と学習効果

- ・ アンケート（2007年）では全回答者が肯定的な回答（母語話者がスペイン語を話しているビデオを視聴することで、状況を理解しながら真正に近いモデルを使って学習できる）
- ・ 語彙記憶に対する不安の声も

7) 課題と展望

- ・ デジタル技術の進歩
- ・ 教師の仕事増加

CALLを利用した授業のメリットとデメリット

<メリット>

- ・ 学生の自発的活動を望むことができる
- ・ 学生は練習問題や発音練習などの進行を自分のペースで決められる
- ・ 録音ソフトやディクテーションソフトの活用が可能
- ・ 教師は補助役にまわることで、個別対応が可能
- ・ ネイティブの発音を多く聞く機会がもてる
- ・ 対人コミュニケーションに至るまでの練習台
- ・ 真正に近い状況を疑似体験
- ・ インターネットでの情報入手

<デメリット>

- ・ 教師の負担増
- ・ 一年間に進める範囲が限定される
- ・ 体系的でないように見える
- ・ 語彙定着への不安